

「『新青年』研究 後悔記」講演会 感想

村 松 まりあ

二〇二一年三月二〇日から五月一六日まで、神奈川近代文学館で開催された「永遠に『新青年』なるもの―ミス テリー・ファッション・スポーツ」（以下、「新青年」展）は、そのタイトルに示される通り、「新青年」という雑誌が多方面から紹介され、雑誌の魅力を立体的に感じられる催しだった。

この度の大衆文化研究センター二〇二一年度公開講演会は、その「新青年」展の編集委員を務めた浜田雄介氏（成蹊大学文学部教授）を招き、インターネット配信で開催された。「『新青年』研究後悔記」と題された今回の講演会は、一九七〇年代から現在に至るまで、『新青年』研究が辿った経緯が語られた第一部と、「新青年」展開催にあたっての裏話が語られた第二部の二部構成であった。進行は、大衆文化研究センター所長の石川巧氏（立教大学文学部教授）が務めた。

「新青年」展に度々足を運んだ私にとって、今回の講演を浜田氏の口から聞

くことが出来たのは思いがけない幸運であった。詳細な内容は、当館から刊行されている『大衆文化』第二六号に掲載されているため、これを機に『大衆文化』を手に取っていただければ幸いです。ここでは、講演の内容を紹介しつつ、一聴講者としての感想を記しておきたい。

さて、全体的な印象として「新青年」展や今回の講演に一貫するキーワードは（繋がり）であったように思う。

第一部では、七〇年代前後の異端作家の復権の流れの中に発足した「新青年」研究会が、アカデミズムとファンダムとが集う場所であり、そこからどのように研究会が活動してきたのが詳細に語られていた。浜田氏は発当初からの参加者であるが、研究会の活動を通じての作家との出会い、研究仲間との共同作業の様子、そして時には先達から厳しい指導を受けた経験等、その体験談からは、様々な人々の思いが繋がっていく様子が生き生きと

感じられた。

一方、第二部では、今回の「新青年」展が、これまでのミステリーに関する展示会をどのように踏襲し、構想されたものであったのか、展示会同士の繋がりが解説されていた。それらを踏まえた上での「新青年」展開催に至るまでの裏話は、非常に興味深いものであったが、中でも妹尾アキ夫氏のご息女から「今回はみんなの展示会なんです」と声をかけられた、というエピソードは、この展示会を象徴するものである。『新青年』は、そこに集った作家がそれぞれに人気の高い顔ぶれであるだけでなく、その内容についても実に多種多様であったが、「新青年」展では、それらが一つの流れとして示されることで、この雑誌の雰囲気を感じることが出来た。

最後に、今回の講演で語られた中で最も印象深かったのは、こうした展示会が、作家遺族と文学館や研究者との繋がりの上でなり立つものであるということだ。『新青年』は創刊から約一〇〇年もの時が経ち、それに関する資料の保存は、遺族から研究機関や文学館へと引き継がれている（もちろん、当センターもそのうちの一つである）。しかし、そうした資料の受渡しは、単な

る物品の移動では無く、保存してきたその思いの継承であるということ、様々な資料と関わる上で、何よりも忘れてはならない点である。

今回の講演では、その中心的話題となった「新青年」展の由来が、ゲート「ファウスト」の「永遠に女性なるもの」であることが明かされていた。講演を聴講し、あらためてこの展示会のタイトルを見つめると、そこに冠された「永遠」とは、一つの大きな力によって達成されるのではなく、様々な人々の繋がりが紡ぎ出すものなのだと感じた。そしてその繋がりをうみだすのは、その対象を愛しむ心や、抑えがたき好奇心なのだろう。思慮深くもユーモラスな浜田氏の講演はもとより、講演の合間に浜田氏と石川氏との間でなされた活発なやりとりにも、そうした（繋がり）を生む原動力を強く感じた。

（立教大学大学院生）